
某年某月某日の某珈琲店の出来事

忍冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

某年某月某日の某珈琲店の出来事

【Nコード】

N1612Q

【作者名】

忍冬

【あらすじ】

日本が降伏した頃のアメリカとイギリスのお話。ある寒い日にイギリスはアメリカに某珈琲店に呼び出されました。

(前書き)

味音痴こんびにしてしてして島国。島国にしてでいぼい・・・作者も
よう分からん

「ねえ、怒ってる？」

怒ってる、でしょ？だって彼は……………

死にかけてたんだものねえ。

コーヒーカップが二つ。並んで湯気を立てる。

「俺だって賛成したんだ。お前のせいじゃねえ」

「でもさ。君は彼のこと好きだったんだろ？一時期だけど同盟まで組んでさ。いまだって本当は面倒みたいんじゃない？」

イギリスがじつと俺を見る。

ねえ、イギリス。君の考えなんて手に取るようにわかるんだよ。

悪かった、とは思ってる。

だけど、

俺は日本が好きなんだ。

真珠湾のあの勇姿、最高じゃないか。

俺の物にしたくて、傷つけて泣かせた。

これからは目一杯甘やかして、俺無しじゃ何もできなくしちゃうつもり。

そのためには何でもするよ？

君をもう一度、裏切っても構わない。

真冬の冷たい空気が枯れ葉を連れて、コーヒーの熱を奪っていく。

深呼吸をひとつ。

イギリスが席を立つ。

「日本はお前に任せるってことに決めた。お前ならあいつのこと、ちゃんと面倒みられるだろうしな」

そう言って去って行くイギリス。

その後ろ姿を一瞥した俺は、自分がまた一人になったことを感じた。

冷めきったコーヒーを一口。

切ない、香ばしい香りと染みとおる、苦み。

コーヒーは香り高い。

かつての君の笑顔みたいに。

コーヒーは苦い。

今の俺の心みたいだ。

(後書き)

ここまで読んでくれて本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1612q/>

某年某月某日の某珈琲店の出来事

2011年1月19日12時27分発行